

# 目 次

|                         |     |
|-------------------------|-----|
| 凡 例                     | 2   |
| あ 行                     | 5   |
| か 行                     | 103 |
| さ 行                     | 181 |
| た 行                     | 241 |
| な 行                     | 291 |
| は 行                     | 315 |
| ま 行                     | 354 |
| や・ら・わ行／海外人名／無署名         | 379 |
| 【研究動向】時衆研究の三世—過去・現在・未来— | 405 |
| 編纂後記                    | 409 |

# 凡例

- 1) 本目録の底本とした文献目録は巻末の編纂後記で詳述する。ただし大幅に加筆・修正している。凡例も異なる。
- 2) 時衆に関する書籍・雑誌・論攷（含辞典・図録・案内書・資料集・新聞記事類）を収録した。専論はもとより若干でも言及のあるものは、学術上の意義を斟酌して採用した。辞書までもを対象としたのは、どういう語が入れられ、どういう語が含まれないかを知るだけでも、現代人の時衆に対する認識を知ることができる効用があると考えるためである。ただし学校教科書・参考書類、観光案内・地図、『角川日本地名大辞典』（角川書店）、『日本歴史地名大系』（平凡社）は寺名記事が膨大で煩雑となるためほぼ不載とした。なお金井清光氏については、その影響のもつ意味を鑑みて、古賀克彦氏協力の下、時衆以外の全業績も掲示している。伊東覺念、河野寂祥、玉樹遊樂、橘惠勝氏ら歴史上の時宗系の僧については（河野氏の活動は戦後だが）、時衆・時宗に言及していなくとも文献を入れた。一方時衆研究以外の分野で戦後活躍している木本至、小林賢次氏ら時宗僧の文献は割愛した。
- 3) 「時衆」の定義は拙著『中世時衆史の研究』（八木書店・2012年6月）で詳述している。簡単にまとめると、現在の時宗のほか、旧一向・天童派（浄土宗鎮西派に転宗）、空也僧（茶筌）、融通念佛宗などの、中・近世念仏勧進型の末裔たちを総称している。彼らは遊行、賦算、踊り念仏、阿弥陀仏号（阿号・阿弥号）ほかの一定の共通性をもつ。
- 4) ゴシック体の編・著者名を苗字ごとの50音順に、次に名前ごとの50音順でならべた。姓の同音異字は区別せず、名の同音異字の場合は1字目の画数の少ないものを先とした。濁音を含むものはその位置があとなるほど上に配置した。例えば「岡田（おかだ）」は「緒方（おがた）」より先である。その上で編・著者名ごとにその文献を排列し、さらに同一編・著者中では発行年月の時系列でならべた（同一年月文献は原則として題目の50音順。ただし上中下などが同時に刊行された場合はその順）。
- 5) 難読ないし文字に複数の読みを想定できる編・著者名には、ルビを附した。僧侶の場合、僧名の読みは音読、戸籍では訓読の場合が多い。本目録ではひとまず僧名を優先したが厳格ではない。
- 6) 署名のない論攷でも、前後の関係から執筆者が確定できる場合は、その人名の項に載せ「無署名」と註記した。新聞記事のうち、記者取材による記事は新聞社の項に入れ、研究者などが執筆した場合はその人物の項に入れた。姓の前に名がつく海外人名と無署名にしかつ発行元不明の文献は「や・ら・わ行」ページの最後に排列した。
- 7) ゴシック体の編・著者名の横の括弧内に、簡単な肩書き・略歴を、機関名・組織名には所在地名を附した。人物は現職や顕職を優先したため収録文献執筆時の職とは限らない。故人については死亡時の肩書きに「元」をつけない。また元職・前職を問わず、「元～」で統一した。複数の元職を挙げた場合は右にいくほど古い。大学教員の場合、大学院重点化にともない「大学院教授」と表記することもあるが、大学院大学以外は学部名を採った。故人については生歿年月日（旧暦の日付はグレゴリオ暦に変換）を附した。存命の方の生年は原則略す。県名には県庁所在地の市名（区名）、政令市には市庁所在地の区名も附す。組織変更により団体名・地名が変化した場合はその前後の名称も載せた。ただし国立博物館・国立文化財研究所については変遷が激しいため現行の部署名の註記はしていない。研究会等の住所は名義上程度にすぎないことと移転が多いためほとんど割愛した。こうした肩書き・略歴・住所は任意で識別のための備考程度の意味合いなので、精度については重視していないこととお断りしておく。
- 8) 文献のコード番号とする6桁の算用数字は発行年月（発行月無記載は00、調査中は99）、◎は書籍、:の次の○および○囲み数字は◎書誌所収の論攷、□は新聞記事である。責任表示（編・著者名）のない文献は発行元の箇所でも立項し、書籍は◎印ではなく○印とした。月刊誌は巻号表記の月より奥付の発行月が1月遅れることが多いが、追加調査で確認していない限り巻号表記の月で6桁表示することが多いこととお断りしておく。複数の書名がある場合、副題とみなしえたものを[]で括弧することがある。そのあと◎の場合括弧内に発行元、○の場合括弧内に編・著者名、書名ないし誌名、巻号数、発行元の順で記した。◎・○ともに発行元のあとの[]は叢書名、◇は発売元・制作者などを示す。
- 9) 書籍のうち、分類の形式上、①②…といった数字をわりあてがたい「第X部～」や「第X編～」といった題については半角文字にした上で1行用いて表示することがある。
- 10) 題目のあとの「(～/～/～/～)」は、題目が章題であれば節題を、節題であれば項目見出しを意味している。あとの※印以下の註釈の場所に記すこともある。
- 11) 書誌データは奥付を基本とし、表紙・背表紙・扉・目次や本文などを補助とした。ゆえに例えば表紙が『史学雑誌』となっても、奥付の『史学雑誌』を採用する。汎用されるTRC MARC等と異なるのでご注意ください。
- 12) 著者・執筆者以外の編者、監修者、発売、企画、製作（制作）などについても採録に努めた。ただし形式上、機関の代表者が責任表示（編・著者名）になっている場合（自治体史だと首長名、学会誌だと会長名など）は、省略した。発行元が機関名ではなく機関の代表者名になっている場合は、機関名を採った。

13) ある書籍が重版、増補版、文庫化されたり、論攷が連載された場合については、1 つずつ立項する場合と註釈欄に留める場合とがあるが、その弁別は恣意的である。

14) 文献名の次の※印以下は筆者の註釈であり、内容の紹介や備考情報を記した。時衆について一定の知識のある読者を想定して附している。本目録の原型となる目録をおもに手がけた古賀克彦氏による功が大きい(絵巻物および古記録に関する情報が特に充実しているのはそのためである)。筆者ないし古賀氏オリジナルを示すため「(小野澤註)」「(古賀克彦註)」を附する場合がある。なお註釈で誤字・誤認についても指摘しており、やや手厳しいと感ずる向きもあると思うが、今後の時衆研究に注意を促すべくあえて掲載した。執筆者各位にはご海容いただきたい。

15) ※欄において、例えば伊藤清郎氏の 198610 の項の※に「→伊藤清郎 199702」とある場合、のちに伊藤氏の 199702 の行にある書誌に収載されたことを示し、その項目にも「←伊藤清郎 198610」と初出を掲げて双方向で参照できるようにした。ただ再版などの場合は表記が斉一でない場合もある。各文献データはその執筆者の項に掲載しているが、ある 1 冊の論集や雑誌で時衆が特集されている場合および時衆を専門に論じた学術誌『時衆研究』『時宗教学年報』『時宗史研究』『時衆文化』『寺社と民衆』などについては、その書誌の編・著者の項でもまとめて一覧できるように重複して掲げている。その際には、詳細なデータは執筆者の項で述べ、編・著者や発行元の項では、目次として瞥見できる程度に留めている。ほかに例えば秦石田の 199303 の行に「詳細⇒秋里籬島 199903」とある場合は、秦と秋里の共著なので詳細情報は同一書誌を載せた秋里の項目をみてほしい、という意味である。

16) [共筆]とは本目録独自の造語で、論攷における[共著][共同執筆]を意味する。目次や論攷の見出し部分に[共著][共同執筆]と明示されることは稀なので、複数人で執筆したことを明示するために便宜上の表記として用いる。

17) 古賀克彦氏の提案により掲載画像の内容についても詳細に記録した。影印に準ずる、背景の写らない書籍・絵巻物等の写真・画像は「図版」、ほかは「写真」と表記した。ただし図録においては、写真についても慣用語として「図版解説」の語を用いた。巻頭の写真や図版は「口絵」で統一した。文字数の関係で「モノクロ」を「単色」と表記している。

18) 時宗の寺名には旧村名ないし道場名を附し、現行自治体名は略す。現在の地籍と異なる場合も多い。例えば「藤沢清浄光寺」「当麻無量光寺」である(前者は「遊行寺」とも記す)。これは廃絶したり時宗を離脱した諸寺院についても同様だが、一部は現行地名を補った。なお「遊行派」は自己正当化を含む自称なのでおむね「藤沢派」とした。「一向派」は「一向俊聖教団」とよぶべきだが、そのままとした。「一向派」とした場合は天童派を含むことが多い。包括宗教法人「天台宗」は「天台宗山門派」、同「浄土宗」は「浄土宗鎮西派」と表記することで、同じ宗旨でも違う派があることに留意して正確を期した(天台宗真盛派(現天台真盛宗)、浄土宗西山深草派などの同宗他派があるため。西山派は鎮西派より強勢であった。「融通念佛宗」・「大念佛寺」(平野)・「佛向寺」(天童)・「石佛寺」(高掬)・「佛光寺」(真宗佛光寺派本山)などは、現在、自称において「佛」の正字を用いるため、それに準拠した)。

19) 『一遍聖絵』『一遍上人絵伝』は『聖絵』、『一遍上人絵伝』、『一遍上人縁起絵』『遊行上人縁起絵』は『縁起絵』と略することがある。『一遍上人絵伝』は史料用語でない上に『聖絵』『縁起絵』どちらをもさす例があり紛らわしいため、用いないことが望ましい。『聖絵』全十二巻は内・外題で「巻～」ではなく「第～」とあるが、わかりやすさから「巻～」と表記した。『聖絵』所有権保持は 1986/7 まで六条道場歡喜光寺単独、2014/12/24 まで歡喜光寺・藤沢清浄光寺共有、それ以降は清浄光寺単独になっている。

20) 神奈川県横浜市港南区千手院(真言宗大覚寺派別格本山)本尊善光寺仏は、文永三年(1266)「出羽國取上郡府中庄外郷石佛」銘があり、通常高掬石佛寺(旧時宗一向派・現浄土宗鎮西派)から流出したものと解されるが、用字からわかるように「石佛」という地名が合うだけで、正確には不明である。本目録では仮に通説にしたがう。

21) 可能な限り表記の原文マ、をつらぬいた。漢数字と算用数字、全角と半角といった峻別や空白も原文マである。そのため()中の()は()にせずそのままにしている箇所がある。ただしワープロソフトでの表示に制限がある正字についてはやむなく表記可能な文字を代用している。／は原文中の改行を意味する。

22) 敬称は略した。僧侶の死去を意味する「寂」「遷化」などは「歿」に統一した。

23) 「時衆」の仏教用語(異音)の読みはジシュではなくジジュであるが、元の書誌情報で多くはジシュとされているのでそれにしたがう。

24) データ採録開始から 15 年以上経ている。その過程で手法が大幅に変化しており、初期のデータはこの凡例の原則に反している場合も多々存在する。ただその確認作業には恐ろしく莫大な時間と人手を要することが想定されるため、ひとまず叩き台として本目録を刊行することを最優先とした。読者におかれては、本目録を読んで気になった文献は、本目録から索引きすることなく、必ず原典にあたることを心がけていただきたい。そして筆者個人での情報収集には限界がある。改訂・増補版に向け情報をお寄せいただければ幸いです。特に、寺史や地方誌、内部向け逐次刊行物、自費出版本の多くが図書館に架蔵されず詳細不明である。今後の課題とするとともに、読者各位のご協力を仰ぎたい。

# あ 行

**相沢菊太郎**（※元〈神奈川県高座郡〉相原村〈現相模原市緑区相原・中央区相原〉）村長。1866/5/28-1962/4/26）

196504 ◎相沢菊太郎相沢日記（相沢菊太郎 [著]・相沢栄久 [編集]、相沢栄久私家版）

※『相澤日記』の翻刻。栄久は菊太郎三男。明治二十一年（1888）二月六日条に、養蚕に関する「当麻村無量光寺演説会」の記事あり。「当山たる己午の方へ向ひ本堂あり客殿あり、僧室あり」「南望は遙に相模川を渡渡し帆船彼は動く」「本堂の前（畳六十一枚）」などとす

**相澤 正彦（相沢 正彦）**（※成城大学文学部教授・時宗文化財保存専門委員会委員。元東京文化財研究所企画情報部委員研究員、元神奈川県立歴史博物館学芸部主任学芸員）

198909 : ①一遍画像

: ②一遍聖絵

: ③真教画像

: ④遊行上人縁起絵（以上、今井雅晴 [編]『一遍辞典』東京堂出版）

※項目執筆。「相沢正彦」名義。肩書き：「同館学芸員」（神奈川県立博物館〈現同県立歴史博物館〉）

199010 : ○紙本着色 類焼阿弥陀縁起絵巻 模本 二巻 光触寺蔵（『神奈川県博物館協会設立三十五周年記念 鎌倉幕府開府八百年記念一鎌倉の秘宝展』（発行元表記なし））※ 1990/10/10-30 於横浜高島屋ギャラリー（8階）、特別展図録。「詞書を遊行三十七代人託資上人」とす。「相沢正彦」名義

199602 : ○ [時宗の絵画]（一、祖師信仰に伴う歴代人絵巻—一遍像、二代真教像、浄阿像など／二、祖師たちの絵巻—遊行上人縁起絵、浄阿上人縁起絵、一遍聖絵など／三、祖師たちの信仰に関わる宗教絵画）（藤沢市教育委員会 博物館準備担当 [編集]『特別展 時衆の美術と文芸 中世の遊行聖と藤沢』（発行元表記なし））※ 1996/2/3-25 於（神奈川県）藤沢市民ギャラリー、巡回展「時衆の美術と文芸 藤沢会場用単色展示図録。肩書き：「神奈川県立歴史博物館」

199709A : ○特別展「遊行寺蔵 一遍上人絵巻の世界」（『神奈川県立歴史博物館だより』第3巻第2号、同館）

※ここでの『一遍上人絵巻』は『縁起絵』。単色図版：『縁起絵』巻三第一段の甚目寺修行

199709B : ○遊行上人縁起絵巻について（神奈川県立歴史博物館 [編]『遊行寺蔵 一遍上人絵巻の世界』同館）

※ 1997/9/13-10/19 於同館、特別展図録

199711 : ○一遍聖絵（『日本美術館』小学館）

200003 : ○時宗文化財調査報告〈絵画の部〉（『時宗教学年報』第二十八輯、時宗教学研究所）

200008 : ○荏柄天神縁起絵巻に見る鎌倉地方様式について（清水眞澄 [編]『美術史論叢 造形と文化』雄山閣）

※十二所光触寺蔵『類焼阿弥陀縁起』・金光寺本『遊行上人縁起絵巻』に言及

200103 : ○時宗文化財調査報告〈絵画の部〉（『時宗教学年報』第二十九輯、時宗教学研究所）

※高野修・相澤・薄井和男 [共筆]

200203 : ○時宗文化財調査報告〈絵画の部〉（『時宗教学年報』第三十輯、時宗教学研究所）※相澤・高木文恵 [共筆]

200703 : ○絵画の部（時宗文化財保存専門委員会 [編]『時宗文化財調査報告書』第1集、時宗宗務所）

※詳細⇒有賀祥隆 200703。有賀祥隆・相澤・高木文恵 [共筆]

200709 : ○絵画 二（清浄光寺編集委員会 [編集]『清浄光寺史』藤沢山無量光院清浄光寺（遊行寺））

※「第八章 文化財」の第三節。初出不明示

**愛知 縣**（※愛知県名古屋市中區）

193509 ◎愛知縣史第一卷（同縣 [著作]、同縣）※津島西福寺・蓮台寺に言及。→[愛知縣 198011](#)

198011 ◎愛知縣史第一卷（同縣 [著作]、同県郷土資料刊行会）※津島西福寺・蓮台寺に言及。←[愛知縣 193509](#) 復刊

**愛知縣海部郡津島町**（※現津島市）

193812 ◎津島町史（同町 [編纂]、同町役場）※「第九編 社寺教會」第二章 佛寺教會の「第五節 時宗」に「一、蓮臺寺」「二、西福寺」「三、宗念寺」（いずれも旧時宗一向派・現浄土宗鎮西派）の項あり、「第九節 廢寺」に当地庄屋による書上＝正徳元年（1711）六月二十一日付「海東郡津島村寺院諸堂書上帳」にみえる光淨寺が本寺蓮臺寺に、浄阿彌は本寺西福寺に合寺したとあり。→[愛知縣海部郡津島町 197312](#)

197312 ◎津島町史（同町 [編纂]、名著出版）※←[愛知縣海部郡津島町 193812](#)

**愛知県高等学校郷土史研究会**

199203 ◎新版愛知県の歴史散歩 上（同会 [編]、山川出版社〔新全国歴史散歩シリーズ23〕）

※「蓮台寺」（津島）の項あり、ただし時宗とす

**相葉 伸**（※群馬大学名誉教授。元上武大学学長。1907-1993）

194004 : ○信濃における時宗の傳播（『信濃』第三巻第七輯、同史學會）

**相原 陽三**（※元〈宮城県〉仙台市史編さん調査分析委員）

199607 : ○ [史料紹介] 仙台市博物館所蔵「寺社御寄附御牒」（『市史せんだい』第6号、仙台市博物館）